
日本、美しの我が祖国

伊佐山詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本、美しの我が祖国

【NZコード】

N3100D

【作者名】

伊佐山詩織

【あらすじ】

婚前旅行地のソウルで再会した友人は、かつて「日帝打倒」を叫ぶ過激派だった。「日帝」の姿を外から見るため日本を出てソウルに流れ着いた友人と、ある秘密を持った恋人。二つの国、いくつもの時代の中で揺れ動く男たち、そして女。カーニバル的シンポジウム小説。

「ところで聰美さん、辛い食べ物は大丈夫？」

「大好きでーす」と手を挙げながら聰美は言った。

「そりや良かった。辛いものがダメだと、韓国の食事は苦痛かも知れないからね」

そう言つと義男は韓国語で店員を呼び、注文を始めた。僕には一言も理解できない言葉をあやつる横顔には深い皺が刻まれていた。「ふつう焼き肉つて訳してるけど、このブルゴギは日本のいわゆる焼き肉とはかなり違いますよ。むしろ日本のスキ焼きに近いんじゃないかな」

「そうなんですか？」

「ほら、あそこでやつてるでしょ？」ああいう風に、鍋の上の肉汁やタレで野菜も一緒に煮込んでいくの」

店員が一人でやつて来てその焼き肉用具一式を僕らの皿の前に置いていた。

「聰美さんは、韓国は初めてだよね？」

「はい」

「十年前かな、健児と最後に会つたのもソウルだつたんだ」「話は少しだけ聞いてます」

「あ、そうか、すまん」

義男は気付き、申し訳なさそうに謝つてみせた。

「いいよ。知つた上でつき合つてるんだから。気を遣われるところが困る」

義男を庇い、庇いながら、こいつがこいつ気遣いの出来る男になつたのか、と、僕は少し驚いていた。人の上に流れた十年という歳月への驚きだった。

生ビールで乾杯すると、義男は中ジョッキの半分ほどを一気に飲んだ。

「いけますねえ」と聰美は義男に、若い女性がオジサンをからかう口調で言った。

「もちろん！ 今日飲まずにどうします？」と、義男はそのからかいをも喜んでいるような口調で返した。

「普段から飲んでるんだろ？」

「普段の酒とは違いますよ。日本から十年ぶりに旧友が来て、奢つてくれるとおっしゃる。その酒を飲まずにいられますか？」

義男はビールの残りを一気に飲み干した。

そして空のジョッキを、コトリ、と小さな音を立ててテーブルに置き、韓国語で店員に何か言った。ビールを追加したらしかった。

「日本は、どう？」とビールを待ちながら義男は言った。

「相変わらず、かな」

「相変わらず、ですか。相変わらず、お前は何を言つてるのかわからんよ……おお、肉はもういいや、いつやつて……」

義男は「チシャの葉」「エゴマの葉」と名前を挙げながらテーブルに置かれた生野菜の葉を取り、葉の上に煮えた肉切れを乗せ、その上に調味料をさらりと乗せ、丸めて口に放り込んだ。聰美も僕も同じようにした。

「美味しいでしょ？」

聰美は大きく頷き、口を隠しながら「すじぐく美味しいです、本当に」

その素直な表情と屈託のない雰囲気に、改めて優香との違いを感じたのだろう、義男は新しいジョッキを軽く差し上げて乾杯を真似、目で僕を祝福してくれた。優香と別れて三年、歳月は義男の上にも僕の上にも平等に流れていった。

*

「明日の案内、石川さんにお願いしてるの？」

焼き肉屋を出て義男と別れ、帰ってきたホテルの部屋で聰美は言った。

「うん。義男ってちょっと癖があるけど、いい奴だろ？」

「そう思つ。す”くいい人だと思つ。けど……」

「けど？」

「私はちょっと」

と聰美は言い、

「シャワー浴びる」

と、クルリとバスルームへ消えた。

*

優香と別れて三人目の女だつた。他の一人と違つて、聰美には、僕との年齢差を感じさせない大人びた部分があり、しかも希有なことに、その大人びた部分を隠しておく聰明さも持ち合わせていた。

そして僕はその聰明さを恐れていた。聰美がどんな気持ちで十三も年上の男とつき合つているのかわからなかつたし、前の結婚のことをあまり聞かないのも、逆に気持ちの上での負担になつていたのだつた。再婚するとしたら聰美しかいない、と思いながら、まあ焦ることもない、なるようになるだらう、と、中年の分別で、聰美の気持ちに対して受け身でいるよつ心がけていた。そして心がけていたら、聰美が、ソウル旅行を懸賞で当て、一緒に行こうと言い出した。聰美は親に友人らとの団体旅行だと嘘をつき、こうして初めて僕らは一人で旅行に出たのだつた。

実は優香との新婚旅行もソウルだつた。そのことは旅行の計画の時に話したのだが、聰美は、前の結婚の話を聞くときいつもするよう、それは情報として聞いてはおくけれど基本的に自分とは何の関係もない、というようなことを言った。そう、確かに、基本的に、聰美とは何の関係もないことなのだ。

けれど、前の結婚の新婚旅行の案内人だつた男に、今回もまた案内を頼んだことは聰美の心を若干ざらつかせたに違ひなかつた。

*

「あなたのお友達なのに悪いけど、ごめんなさい、私、あの人、怖い」と聰美は電気を消したあとの枕語りで言った。

「怖い？」

「うん」

「怖くはないよ。政治だって、もうどうぐに辞めてるんだし、俺と同じ、ただの、いい歳した独身のオッサンだよ」

「政治だと、そういうんじゃないの。もつと気持ちの問題って言うか、そり、心理的な、内面的な問題だと思つの」

「屈折してるつてことか？」

「屈折だけなら、怖くないと思つ。それより、あの人、私と同じような人なのかも知れない」

「立場はまるで違うと思つけど、気質は、確かにね、近いかもしないよ」

「でしょ？ だから怖いの」

「困つたな。明日の案内、どうする？」

「別に断るほどじゃないから、いい。あの人のこと、あなたに聞かれたから、ちょっと正直に言つただけだから。誤解しないで欲しいんだけど、別に嫌いじゃないのよ。あなたが言つように、いい人だとは思うから」

「いい人よ、だけど……か」

「そういうのも違う。何か、違うのよね。なんだろう？」

「いいよ、無理に考えなくても。ただのガイドだと思えばいいんだし」

「思えないよ。言つたでしょ、私に似てるのよ。だから、うん、なんて言つたらいいのか」

「心を見透かされそうか？」

「もう見透かされてるとは思つの」

「そこまでの男じゃないよ」

「あの人、昔から、あんな雰囲気だったの？」

「だいぶ変わったね。昔はもつとまっすぐな政治青年だった。挫折もあつたんだろうな。あれじゃ、昔なら転向つて言われただろうね」

「あなたも昔、政治青年だったんでしょ？」

「俺は」と僕は軽く笑つた。「昔から醒めてたと思つよ。どうちつ

かずた。だからいつも責められてた。いつたいどつちにしへんだったて。「ウモリみたいな奴だつて。スパイかつてね」

「あなたも昔は色々あつたのね」

「若い人にはわからんだろうな」

「あ、何、その言い方？ ナマイキ」

「オジサンつてのはナマイキなんだよ」

「開き直つたなあ！」

聰美が抱きついていつものように僕の首筋を激しく舐め、二人の心に空いた隙間を体で埋め合わせようと合図してきた。聰美との間では、和解の儀式がまだ儀式としての力を十分持つていた。

*

十年前、店の韓国人たちとケンカしながら『俺は日本帝国主義打倒のためにここにいるんだ、日帝打倒の日まで、石にかじりついてもここにいる』などと酔っぱらつてわめき、優香の顰蹙を買った義男と、今回同じソウルで再会した義男とはまるで別人だつた。

「変わつたか？ 確かにね。否定はしないよ」

「変われるだけましだよ。俺の親父のような人生もあるからな」「そうだつたな」と義男は言い、「親父さん、気の毒だつたな」と付け加えた。

「気の毒も何も」と僕は言った。「変われないってのはどうしようもないから。でも最期はさすがに哀れだつたよ。ボケが進んで来て、自分が何年も前に除名されてることも忘れて、今も党の地区委員長でいるような口調で指令のことを話すようになったんだ。もともと脳梗塞で倒れたのも除名事件のストレスだろうし、親父は、政治に関わつて、政治に捨てられて、何もいいことはなかつたんじゃない

か

「本当にそう思うのか？」

「適当な次期に辞めていればまだ、よかつたんだ。辞める時期を逸したのはまずかった、とは思うよ」

「俺は」と義男は静かに言った。「お前の親父さんを尊敬してたよ。

戦前からの非転向だろう? 四十五年の十月まで治安維持法でぶち込まれてたってのは、勲章だと思つてたよ

「親父にはその勲章は重すぎて、もう首を上げることもできなかつたのさ。回りも、前も、何も見えなくなつてしまつてたんだ。知つてるか? 年金も無かつたんだよ。自分が六十になるころには社会の生産力が上がつて社会主義革命は成就していはばだから、年金も何も必要ないつて、若い頃から払つてなかつたんだ。……ところで義男は親父さんには会えた?」

「五年前に会つたよ。死ぬ直前に」

「よかつたな、それは」

「うん。神社の禰宜つて言つたつて、最期は普通の人間さ。氣弱になつて、交通費を送つてきたよ。もう良いだろう親父を許してやつてくれつて、お袋が電話してきてね。帰つてみたら、親父、小さくなつてて、手なんかもう、ミイラだよ。親父とケンカして大学やめてから十五年ぶりの再会で、お袋も、親父も、俺も、泣いた。結局、死に目には会えなかつたけど、最期に会えて良かつた……『ごめんごめん、湿つぽくなりましたね』と義男は聰美に氣を使って言つた。「いいえ、気にしないでくださいね。お一人とも十年ぶりなんですから、積もる話もあるんでしよう?」

「まあ、あると言えばある、ないと言えればないな」と僕は言つた。

「変なの」

「聰美さん、男同士なんて、こんなもんですよ。話題も無いのに、会わなきやならない、会つてしまえば話題を探さなきやならない、いちばん無難なのは互いの肉親の消息ですよ。死んでしまつた人間は、もう直接には人を傷つけることはないですからね」

「直接には、ですか?」

「まあそうですね。死人が起きてきて人をぶん殴る訳じゃない」

「でも、死人の名を借りて、生きてる人が、生きてる人を、ぶん殴つたりしますよね」

「うーん、聰美さんは聰明ですね。いつもこうなんですか?」

「ええ？」と聰美は首を傾げ、子供のよつた仕草でとぼけて見せた。自分の鋭さを見破られそうになつたとき、聰美がいつもとる戦術だつた。

十年前の義男なら、ここできつと『バカの振りはやめろよ』などと、聰美を追い込んだに違ひなかつた。ところが今回の義男は軽く笑むだけで何も言わず、ただ焼酎の杯を干すのだつた。

「石川さん、おつきしましようか」

「とんでもない。ここは、女性がお酌しかやだめな国なんです」

「儒教ですか？」

「儒教？ 聰美さん、やはりあなたは賢い人だと見た」

「いいえ、そんな。本にそう書いてたんで、言つてみただけです」「僕はね」と義男は手酌で焼酎をつぎながら言つた。「何でも儒教にせいにするのはよくないと思うんですよ」

「はい」と聰美は言つた。興味ありげな返事を装いながら、實際は『拙いことを言つた』と思つてゐることは明白な表情だつた。それに気付いた義男は、僕の方を向いて話を続けた。

「儒教儒教つて言つけど、日本だつて、中国だつて、ベトナムだつて、南の方の華僑国家だつて、漢字文化圏はみんな多かれ少なかれ儒教の影響を受けてますよ。韓国だけじゃない」

「でも、韓国ほど純化された儒教じやないだろ」と僕は言つた。

「だから、そこが問題なんだ。なぜ韓国ではこれほど純化されてしまったのかつてことだ。簡単だよ。儒教が好きだつたからさ。空理空論が大好きな国民性、これに尽きるね。自分たちが好んで受け入れて、さらに純化して、自分たちの生活をがんじがらめに縛り上げてしまつたくせに、なにかあればなんでも外来の儒教のせいにする。じゃあ儒教が嫌いかつていつたら、そんなことはないんだよ。とりあえず儒教つていう外来の宗教のせいにして、自分たちを守つてるんだ」

「何から守るんですか？」と聰美は言つた。笑顔だったが、さつきの躊躇を振り切つて本氣で議論しようとしていることの明白な口調

だった。

「何からだろ」「」と今度は義男が外した。

「日本から、ですか？」

「おい、健児」と義男は笑いながら僕に言った。「」んな賢い女性をどこで見つけてきたんだ？」

「日本で、だよ」

それを聞くと、義男は手を打ち合わせて笑った。

「聰美さん、あなたの言うとおりさ。日本にいちや解らないだろうが、韓国での日本のプレゼンスってのは圧倒的なんだ。ほつとけば韓国は日本になってしまうんじやないかって、みんな本氣で心配してるよ。日本文化の段階的開放だつて、なんで段階をつけなきゃならないか、日本にいたら理解不能だと思つよ」

「解らないです」

「日本で、たとえば政治家が、アメリカ映画の規制をするなんて言い出して、それを大衆が一定程度支持するなんて考えられないでしょ？」

「やつぱり植民地だつたことが……」

「公式にはそうでしょ？ 日本を嫌つてみせることが、この国では政治的に正しい態度なんですよ。無条件で『正しい』んじやないですよ、政治的に正しいんですよ」

「政治的？」

「今日、明洞を歩いたでしょ？ 日本人いらつしやいの日本語だらけだつたんじやないです？ 本屋さんに行つて『らんない』よ、日本論のコーナーがあつたりして、いい加減な本が結構な部数売れてますから。だから、本音では憧れてて、でも口に出すときには警戒感をもつて話さなきやならない国なんですよ、この国における日本つてのは」

「それが政治的って意味？」

「そうです。ま、この国の出生の秘密に関わる問題ですかね」

義男は僕の方を見て、こんな硬い話題をすまないな、と田で伝え

てきた。けれど聰美の方が続けた。

「日本からの独立が独力では出来なかつたってことですね」

「そうです。それがもう、国家としての、民族としてのトラウマになつてしまつてるんですよ。トラウマを乗り越えるために、自分たちがいかに植民地支配に抵抗したかつて国造りのドラマを語り続けなきやならないんです」

「それが政治的つて意味ですか」

「そうです」と、義男は軽く言つた。そして、もう聰美の言つことに『驚いた』というような芝居はせず、堰を切つたように韓国と日本のこと話を話し始めた。この男のこんな話を、聰美はどんな気持ちで聞いているんだろう、と僕は少し気になつていた。

*

在日韓国人と言つても、聰美の場合、立場が極端に微妙だつた。母親は日本人で、在日の父親は聰美が一つの頃に事故死した。そして母親が再婚した相手は日本人、当然第二人も日本人となつた。小学生の頃、自分だけが韓国人であることを聞かされたとき、その意味が最初わからなかつた。今そこにいる父親が本当の父親だと思いこんでいたし、国籍の話など理解できる歳ではなかつた。もちろん、韓国人である意識などかけらもなかつた。だから逆に、韓国籍であることをあまり人に言うな、と母親に言われたときもその意味さえ理解できなかつた。理解できないうなりに、自分は何か違うんだけど、それだけは理解していた。

……中学に入ったとき、そこの学校に、いわゆる民族教育に熱心な先生がいてね、私が韓国籍だつて知つて、本名を名乗る気はないかつて聞いてきたの。「本名?」つて思つた。私の本名は「山本聰美」でしょう。他に何があるのつて。外国人登録証に載つてる「吳」ですか? あれば、何か、間違えて掛けられた表札みたいなもので、私とは何の関係もありません、そのうち帰化して取り替えますつて、そんな風に言つたと思うの。それで本名宣言はまあ棚上げになつて、地域の民族教室に連れて行かれたの。太鼓や踊りなんか教えてる場

所で、そこで、みんなが太鼓とか習つてゐるのを見てたんだけど、応接室みたいなところで先生とその人たちが話し合つてるのが聞こえてくるのね。そのうちの一人が、物凄い口調で反対してるのよ。

「アイノコ」つて聞こえてね。最初、「愛の子」かと思って、何を言つてるんだろ? それで耳を澄ましたら、純粹な朝鮮人じやないつて意味の「命の子」だつて解つて、初めて自分の立場が理解できた。先生には悪かつたけど、気分が悪くなつてそのまま黙つて帰つちゃつた。朝鮮人から見たら自分は日本人との「命の子」なんだつてわかつて、家に帰つてからも胸が苦しくて、いろんな感情が湧いてきて、泣きたくて泣けなかつた。その日の夜、先生から電話があつたけど、出なかつた。次の日、どうするつて聞かれたけど、「私はアイノコですか」つて断つた。それでもう、その先生とのつきあいも切れたわ。向こうからは何も言つてこなかつた。安心したんじやない? しょせんあの先生もちゃんとした日本人なのよ。そんなんものよ。……

*

ソウル一日目の朝、ホテルのエレベーターホールから出て、義男の姿を見つけると、聰美は知り合いに会うときいつもするように、「おはようございまーす」と透明な明るい声で挨拶した。

義男は早足で歩み寄つてきて、「タベはすみませんでした」と聰美に頭を下げた。

「なにがですか?」

「色々と議論をふつかけて、一人でしゃべりまくつてしまつて」「そんなん、楽しかつたですよ。ああいう話、他ではあまり聞けませんから。石川さん、気にしないで下さいね」

「そうだよ。マズくなつてきたら俺が止めるから、大丈夫だよ。それに、義男が思つてるような女じやないよ、こいつは」「あ、ひどーい」と聰美はふくれてみせた。

「ちょっと安心しました」と義男は言つた。「あんな風に議論をふつかけて、これまで何人の友達を無くしたことか。聰美さんは大丈

夫だと思つたなんだけど、いちおつ謝つておいつと思つたんだ

「その言い方も、なんかへんです！」

「まあ、オジサンをあまりいじめるなよ」と僕は言つた。

「そりだよ。これで結構傷つきやすいんだから」

「そんな、見えなーい！」と聰美は軽薄そうに言つた。

「ま、行きましょうか」と義男は聰美的のその口調が少し不愉快だったらしく、ややぶつきらぼつと言つた。「定番の観光スポットだけど、外せないとこりだからね」

*

地下鉄から降りて景福宮に入ると、義男は振り返りながら、

「前に来たときより、空が広くなつたと感じないか？」

「前は、ほら、ここに博物館があつたろ?」と僕は言つた。「たしか朝鮮総督府だつたとかい、う

「もう何年も前に取り壊されちゃつたんですね」と聰美。

「そうです、こっちの人にとっては、あれこそ植民地支配の象徴ですかね」

「私、一度見てみたかつたな」

「なかなか壯觀でしたよ。王宮の敷地の中にいきなりあんな近代的な建物を建てたんだから、当時の人は本当にたまげたろうね」

「たまげたどころか、抵抗する氣力を無くしたんじやないですか？」

「基本的にはそうだと思いますよ。この国の公的な歴史觀とは違いますけど、あんなものを宮殿の中に建てられちゃ、誰だつて、もうお終いだつて思いますよ」

「おい」と僕は少し心配になつて言つた。「そんなこと、大声で言つて大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。十年前とは違う」と義男は僕の方を振り返りながら言つた。

*

十年前、優香と三人で飲みに行つた三夜、すべて無事では済まなかつた。最初の夜は屋台で（義男によれば）「日本人がこんなとこ

ろに何をしに来たのか」と絡まれ、這々の体で逃げ出した。「一日一日の夜は隣の席で飲んでいた男がいきなりゴミ箱を蹴り飛ばして、（義男によれば）「日本語が聞こえるような店で酒が飲めるか!」と、僕らに向かつて叫び散らし、喚き散らし、義男の抗議にも関わらず、店主に追い出されたのはこっちだつた。まだ二十四だった優香は、可哀想に、一日続きの事件に恐れをなして、ホテルに戻つてから、もうこんなところ嫌だ、と泣いた。

「これが私たちの新婚旅行なの!」

返す言葉もなかつた。

*

「十年前ね、あれで義男とつれとは決定的に決裂しちゃつたからね」「何があつたの?」

「筆舌に尽くし難し、だね」

「おい、もういじめないでくれよ。十分反省したんだから」

「で、何があつたの? 教えて」

「僕が子供だつたんですよ」と義男は言つた。いつのまにか義男と聰美が並んで歩き、僕はその後ろからついていくといつ格好になつていた。「あの時、健児たちは三泊したんですけど、最後の夜に僕が大失敗しましてね」

「最後の夜だけか?」

「前の二夜は向こうから絡まれたんだから、俺のせいじゃないよ」

「そりやそうだ、すまん」

「じゃあ最後の夜は石川さんが絡んだんですね?」

「『明察。それもいちばんやつちやいけない絡み方で絡んだんですよ。わかります?』

「日本人のくせに韓国人に向かつて偉そうに説教したとか?」

「聰美さん、『明察も程が過ぎると嫌みですよ。でも、実はその通りなんです。僕らの隣の席で、若者がタバコを吸つてたんですよ』『儒教の国なのに?』

「そうですよ! そうですよ! 黙つてはおれないでしょ。僕

らは誰もタバコ吸わないし、あんまり煙いんで、言つてやつたんですよ。タバコはやめてくれつて

「やめました？」

「とんでもない。まだスパスパ吸い続けてるんです」「あの時点で」と僕は口を挟んだ。「話の通じる相手じゃないつてわかつたんだから、もう店を替えればよかつたんだ」

「今ならそうするよ。でもあの時はそつはいかなくてね、『君たち韓国人は礼儀を忘れたのか』って、言つちゃつたんだ」

「すごいことを言いましたね」

「それを聞いて」と僕はまた口を挟んだ。義男と聰美がどんどん接近していくのが僕にはあまり面白くなかった。「店中が騒然となつたよ。こつちはもう、何を言つてるのか、何が争点になつてるのかわからないし、つれは泣き出すし、死ぬ思いだつたよ」「俺はそんな死ぬ思いをこつちですつと続けてるんだ」

義男はボソリと言つた。

もう勤政殿の入り口に着いていた。

*

義男に先導され勤政殿の石段の上に立つと、聰美は両手を広げながら、

「空があおーー」と言つた。「天氣もいいし、寒くもないし、来てよかつたあ

「そりやよかつた。韓国、好きになれそつですか?」と義男は言つた。

「好きつて、どういつ」とですか?」

聰美は義男の方を見もせずに、張り付けたような笑顔のまま言つた。

義男は黙り込んだ。

「石川さんは」と聰美は義男の方を向き直つて言つた。「日本が好きですか?」

義男はまだ黙つていた。

「私は大好きですよ、日本」と聰美は言った。

「そうですか。幸せなんですね、聰美さんは」

「石川さんは不幸なんですか？」

「それも難しい質問ですよ。まあ、そうですね、一つの国を好きになれそんかなんて、軽々しく聞くんじゃなかった。さつきの質問は撤回します」

「別に撤回しなくてもいいですよ」

「いいえ。断固撤回させてください」

「こわーい」と聰美はふざけて言つた。

「次、行きましょうか」と義男は聰美と目を合わさずに言つた。聰美が僕以外の男とふざけながらここまで眞面目に話しているのを初めて見て、僕の漠然とした面白くない気分は、しつかりした嫉妬へと変わつた。

見上げれば、勤政殿の屋根の上は、十年前の記憶と同じ、ポスターのような青空だつた。あの時も義男が僕らを先導し、新婚だつた僕らは何かつまらないことで諂いながらこの石段を登り、そしてその諂いはこの短い石段を登りきつただけで跡形もなく消え去つていた。

『お前ら仲がいいな、本当にうらやましいよ』

若かつた義男に言われ、何を当然なことを、と優香と一人顔を見合せたのが、まるで昨日のことのようだつた。

*

優香と結婚する前に友人と始めた小さな会社は滑り出しこそ順調だつたものの、数年もしないうちに、いつのまにか、取引先に支払い期限のことでの頭を下げてまわるのが社長である僕の仕事となつていた。渦中にいる人間には見えてはいなかつたが、バブルはしつかりとはじけていたのだつた。養殖した苔を庭付きマンション向けに流していた僕らの会社はバブル崩壊のあおりをもろに受け、資金繰りは悪化し、定期も取り崩し、ひどいときは従業員への給与の支払いも危うくなつて僕は金策で一月も家に帰れず会社での仮眠がやつ

との状態、という時期もあった。ところが僕がそんな生活に落ち込んでいても優香は決して浪費をやめることはなかつたし、ついには、自分の親に頼めば打ち出の小槌のように溢れ出てくる十万二十万の小銭のためにいつも頭を下げている僕のことを露骨に軽蔑し始めた。もともとお嬢様だつた優香が愛していたのは颯爽とした青年実業家であり、求めていたのはその奥様という地位でしかなかつたのだろう。娘が出来てからずっと入り浸つていた実家へとついに帰つたきりになり、家内は荒れ、もはや関係は修復不可能と思われ、思われた頃に僕はバイトの女性と関係を持つた。その情報は興信所経由で優香の実家へともたらされ、離婚と、娘の養育費はともかく、当時の僕には払えるはずのない莫大な慰謝料を求められた。それから正式に離婚が成立するまでの二年間、単に優香のプライドを満たすためでしかない慰謝料のために、僕は胃潰瘍で一回、急性腎不全で一回入院しながら、社長みずから土をいじつて苔を植えつつ死ぬような思いで働いたのだった。

そうやって貯めた金に自宅を売り払つた金、そして借金を足して、求められた額を銀行に振り込み、正式に離婚するために喫茶店で会つた優香は、いきなり、

『やつぱりハゲたわね、あなた』と言つた。

ハゲだけは絶対にイヤ、と若い頃から言つていた女だつた。こんな女に振り回されたのか、と自分に對して怒り、そしてアパートに戻つて鏡を見れば、ズタボロに疲れ果てたオッサンが悲しさに引きつった笑みを浮かべているのだった。洗つても落ちぬ黒い網のような細かいひび割れに包まれた手で、情けなくも悔し涙を拭いつつ、結婚など一度どゴメンだと思つた。

*

「石川さんは、女が嫌いな人なんですか？」

昼食で入つた蓼鶏湯屋で聰美はいきなり言つた。こういいくなりな質問は聰美が気を本当に許している証拠だつた。聰美は気に入つた相手にはちょっと反発してみせるところがあり、ゆうべの『私

はちょっと』もその入り口だったのだろう。それに気づいてしまって、昨夜、聰美の言つことを眞面目に受け取ってしまった自分が道化じみて感じられ、嫉妬がいや増すのだった。

「はは、どうしてですか？」と無理に作った笑いに被せて義男は言った。

「その歳まで独身だなんて」

「聰美さんでもそういうことを聞くんですね」

「はい。聞いてちゃいけませんか？」

「いけません」

「なあさら聞きたくなりました」

「で、聞いてどうするんです？」

「健児さんから乗り換えるかどうか、決めるんです」

「おじおじ」と僕は堪らず言つた。「義男が本気にしてからんだ。聰美の過激な冗談が通じる人間ばかりじゃないんだからな」「冗談だと思うの？」と聰美は僕を見た。目は真剣そつだった。僕は絶句するしかなかつた。

「冗談よ、もちろん」と聰美は笑つて言つた。

「残念だな」と義男は言つた。「聰美さんみたいな女性となら、僕も結婚できたかもしない」

「まだ遅くないでしょ？」

「遅くはないけど、まだ時期じゃないってところかな」

「上手い言い回しですねえ。私もそれ、これから使おうかなあ」「こつちでの出合いなんかはなかつたのか」と僕は口を挟んだ。

「あつたよ。何度も。でも、結婚と恋愛とは違うんだよ。そういう、健児」

「バツイチ中年男の経験上、違つと言えるね。恋愛は自由、結婚は束縛、なんて月並みなことを言つて訳じやないが、まるで正反対だと思つてもいい」

「そういうことですよ、聰美さん」

「でも、それは、健児さんは結婚してみてたどり着いた結論ですよ

ね。石川さんは、まだ結婚なさってませんよね？」

「もう、そんなことより蓼鶏湯を食べましょ。」この店はまだ日本人に汚染されてないから、本当に美味しいんですよ」

そういうと義男は小皿に取った鶏肉に粒の荒い塩を振りかけた。

「最近じゃ、日本人観光客が蓼鶏湯屋に入るようになつて、どこも味が落ちてね。日本人が面倒がるんだろうけど、最初から塩味をつける店が増えてるんだ。でもそれじゃ蓼鶏湯じゃないよ。ごく薄い味の鶏に、粗塩をこうやって振りかけて……」

「これ美味しい」と義男をさえぎつて聰美は言つた。「こんなのが食べたことない」

「蓼鶏湯は始めてですか？」

「日本でも食べましたけど、スープがこんなに濃くはなかつた。これ、あつさりしてるので、どうしてこんなに美味しいの」

「でしょ？　これは鶏が違うんですよ。この鶏は、骨がね、黒いんですよ」

「鳥骨鶏ですか？」

「明察。だから、これも正確には蓼鶏湯じゃなくて、蓼鳥骨鶏湯つて言うんです」

「日本にも、これ、あるのか？」と僕は言つた。

「あるだらうけど、めちゃくちゃな値段がすると思うよ。これだって、こつちの物価水準で考えたら結構高いんだから」

「私、これ気に入つたなあ」

「こつちに住めば毎週でも食べられますよ」

「あ、それは御免です」と聰美は笑つた。「私は日本が好きなんです」

「あんな国がですか」

「ええ、大好きですよ」

義男は舌打ちこそしなかつたが、露骨に嫌な顔をして蓼鶏湯にかえつた。

僕らはしばらくの間、黙つて蓼鶏湯を食べ続けた。蓼鶏湯は美味

かつたが骨が多くて面倒で口をきけなかつたのと、それ以上に、聰美の何度も「日本が好き」発言が義男のプライドのようなものを傷つけたらしい雰囲気が伝わってきて、誰にも言葉の接ぎ穂が見つからなかつたのだった。

*

「石川さんは」と、蓼鶏湯をあらかた食べ終わり、黒い骨に残った肉をしゃぶり取りながら聰美は言った。「どうして韓国にいるんですか？」

「日本が嫌いだからです」

「でも、だつたら、アメリカでも中国でもよかつたんじゃないですか？」

「そうですよ。中国でもどこでもよかつたんです」

「だつたら、なんで韓国にいるんですか？」

「なんでだらうな」と義男は外した。

「女だよ」と僕は言った。「韓国に行けつて言つた女がいたんだ」「バラすなよ」と義男は無理な笑いを作つた。「女一人の言葉に惑わされて、大陸浪人のまねごとだよ。若かつたとしか言いようがないね」

「その人とは別れたんですか？」

「別れてから、こつちに來たんだ」

「どういうことですか？」

「学生時代から一緒のセクトの仲間でね。『日本帝国主義打倒とか言つてゐるくせに、あなたは日本のことは何も知らない。韓国にでも行つて、日本を外から眺めてきなさい』つて、これが別れ際の言葉だつたんだ。バカだね、韓国に行けば、またあの女が俺のところに戻つてきてくれるような気がしてたんだ」

「で、その人は？」

「すぐに結婚したよ。フツーの男とね」

「さびしそぎる」

「でしょ？」

「でも、それから何年経つんです？　来た理由はわかりましたけど、居続ける理由はわかりません」

「さつき言つたでしょ。日本が嫌いだからです」

「どうして？　日本のどこがそんなに嫌いなんですか？」

「日本は僕の故郷だからですよ。故郷が好きな人がどれほどいるって言つんですね？」

「それだけかなあ」とさらに聰美は突つ込むのだった。「さつき、日本帝国主義打倒って言いましたよね。もっと思想的な問題として嫌いなんじゃありませんか？」

「それはもうないです。消えました」と義男はあっさりと言い、その口調に僕は驚き、

「じゃあなんで、帰らないんだ」と聞いた。

「帰つて何をする？　韓国語を教えるか？　日本に帰つた僕には何にもないだろ？」ここで、日本語教師として生きていくしかないんだよ、俺には」

「韓国が好きつて訳でもないんですね」

「韓国？　ここですか？　反吐が出るほど嫌いですよ」

「やつぱり？」と聰美は軽く笑いながら言つた。

「笑いましたね。そうですよ。実際、笑われても仕方ないと思います。日本は故郷だから嫌い。韓国は住んでるところだから嫌い。こんな無茶苦茶な人間、笑われて当然です」

「石川さんつて、かなり屈折してませんか？」

「しますよ。じらんの通りです」

「じゃあそつさま、出ようよ。もう一時だ」と僕は聰美と義男を遮つて言つた。僕には、義男の忍耐力をもう一度試してみる勇気などなかつた。

*

十年前も優香と義男との間で同じような議論があつた。

『日本が嫌いなんて、そんな人は日本から出でていけばいいんです』と優香は言つた。

『だから出てきてるでしょう』

『二度と帰つて来ないでください』

『帰りますよ。日帝打倒の日には大手を振つて』

『なんですか？ その一ヶティつて』

『だから日本人は困るつていうんですよ。韓国人に聞いてごらんな

さいよ、日帝、こっちでは「イルチエ」って読むんですけどね、日帝つて言葉を知らない人はいませんよ。もちろん昔の日帝支配がつたからですけど、でも現状を見てごらんなさい、日本帝国主義はもう復活して、アジアを、今度は軍事力じゃなく経済力で支配しようとしているじゃないですか。こっちでは、大日本帝国つていうのは歴史じやない、現存する脅威なんですよ』

『一生懸命働いて、良いものを作つて、外国の人々に買つてもらつのが、帝国主義なんですか？』

『そうですよ。他人を踏みつけにして自分らだけが豊かさを享受する。これが帝国主義以外のなんだと言つんですか』

『もうやめろよ』と僕はその時も議論を止めさせた。あまりにも不毛な議論に思えたから。

若干の沈黙の後、義男は腹いせのように、いきなり隣の席の若者のタバコを注意した。そして結果、店全体が騒然とするような騒ぎになり、義男は立ち上がりつて韓国語で演説し始めて焼酎を頭からぶつかられ、ぶつかれた男に今度は義男がコップの焼酎を浴びせかけ、今度は日本語で『俺は日帝打倒のために云々』と叫びだして店はいっそう険悪な雰囲気になり、この終わりの見えない喧噪の中で泣き出す優香と僕とをホテルまで連れ帰つてくれたのはそこにいた日本語の出来る韓国人だった。

次の朝ホテルまで迎えに来た義男に優香は挨拶もしなかつた。当然だと思った。

*

日本語学校に授業で戻らなければならない義男とは夕食の待ち合わせ場所と時間を決めて別れ、僕らは南大門市場に入った。十年前

と人だかりは変わつていなかつた。ただ、日本語が増えていた。屋台のおばちゃんまでもが日本語で呼び込みをする。

「石川さんの言つてた、日本のプレゼンスつて、やっぱりす”いのね」

「僕らがここにいるつて事がすでにプレゼンスなんだろ？」「石川さん、気づいたのかしら？」と聰美はいきなり言つた。

「何を？」と、僕は間抜けなことに聞き返してしまつた。

「別に隠す訳じゃないけど、あらためて言う必要もないでしょ？」「と聰美は僕の間抜けた返事にかまわず言つた。

「もちろん。でも、普通の日本人は、あそこまで日本が好きつて言わないかもね」

「右翼つて思われたかしら」

「さあね。今時右翼なんているんだろうか」

聰美は立ち止まり、屋台に山と積まれてている服の一着を手に取つた。すかさず横にいたオジサンが「ヤスイヨ、イチマノン」と声を掛けた。聰美は韓国語で何か言い、驚いたオジサンと何かやりとりをしていた。

結局何も買わず、オジサンとは手を振りあつて別れた。

「通じたわ、私の韓国語

「これが初めてだつた？」

「韓国ではね。日本では留学生と何度か話したけど。ああ、嬉しい。これで本当に韓国に来たんだなつて、実感した」

「祖国に帰つてきた、じゃないのか？」と僕はふざけていった。

「バカなことを言わないでよ」と聰美は言つた。「私の祖国は日本よ」

「そんな言い方も、普通の日本人はしないと思つよ

「……そうよね。私つて、ここにいて、本当は何人なんだろう？」

聰美はたまに見せる真面目な顔で言つた。

「帰化しようとは思わなかつたの？」と、僕は聰美に初めて聞いた。

これまで聞く機会がなかつたのではなく、あえて聞かなかつたのだ

つた。

「もちろん思つたわよ。でも、帰化したら、自分が何人なのか、よけい解らなくなるような気がして、思いとどまつたの。アイノコとして生きてきた私の人生つて、単に国籍を日本にして、それですつきりつていうようなものじやない気がするの。帰化して、それで、あ、失敗だつた、すみません韓国籍に戻していく、ださい、なんて言えないのでしょう？」

「そりやそうだ」

「子供の頃はね、はやく大人になつて帰化したいつて、そればつかり思つてた。醜いアヒルの子は早く白鳥になりたかつたのよ。白鳥になれるつてわかつてるから、醜いアヒルの子でも耐えていられたの。もちろん、差別された経験なんてないわよ。誰も私が韓国籍だなんて知らないんだから。お父さんも優しかつた。でも、自分だけが人と違うつていうのは、これはもう、心の根つ子なのよ。どうしようもないものなの。国籍がどつちとか、もう関係ないのよね。どつちでもないのが私なんだから。どつちでもないことに傷ついたつていうのでもないの。傷つく以前の問題なの。韓国語勉強したのも、そう。勉強してどうにかなるつてものでもないのよ。でも、何かをつかみたかつたの。アイノコである私の何か、根つ子みたいなものを」

僕らはもう市場の終わり近くまで歩いて来ていた。

「どうする？ これから六時まで」

「一度ホテルに帰つて、私、ホテルの免税店に行きたい」

「そうしようか」

うん、と返事しながら、聰美は、雑多な雑貨が板の上に積まれた屋台の前で立ち止まつた。

「これ」と聰美が手に取つたのは、紙箱に入った白磁の徳利とお猪口のセットだつた。

「何？」

「うちにあつたのと一緒に、昔うちにあつたのと一緒に、これ」

「一也、眞つひ・ト総美は材帯をとりござった。屋台のおばちゃんがなにやら聰美に話しかけた。聰美も応じた。

*

ホテルの部屋で、買つてきた徳利とお猪口をテーブルに並べ、聰美は何か神妙な表情で考え込んでいた。僕は同じテーブルの椅子に座つてテレビで日本の衛星放送を見ながら、聰美の様子が気になつていた。つきあい始めて一年近く、これほど真剣な表情で考え込む聰美をこれまで見たことがなかつた。

「たつた五千ウォンだなんて」と聰美は言った。独り言のように、けれど聞いて欲しそうな口調だった。

「因皿田ベリニ?」

「どうしたの?..」

「昔ね、これと同じものを、弟たちがいたずらして割つちゃったの、お母さん、ものすごいく、それまで見たことがないくらい怒つて怒つて、平手で二人を何度もぶつたの。お父さんがとめに入つても、もうおさまらないくらい怒つて、仕舞いには自分で泣き出して……そうか、そういうことって、今解ったの。これって私のお父さんの形見だったのよ」

۱۰۷

人の面影が染みついてさえいれば」

「確かに、形見なんて、そういうものかもしれないね」「うう。」
ムのぶとくの形見。二の子

「それで、それ、買つて歸つておるのへ。」

「あ、そつかあ、擲えたらい、おぬせこい、『せこ』、おみやげ』って
渡すやつばかりのドリカムーのアビ。』」ついで、魔術の段落

娘さんとか

「可愛いキー・ホルダーでも買つてこくよ。ひやぢなやつでこい」

「お母さんには？」

「石鹼を頼まれてる。重いのこ」

「買い物に行こうか、上の免税店」と聰美は立ち上がりながら言った。

「免税店は高いよ」

「確かに店で買わないとダメでしょう、おみやげなんだから」

「まあ、そりゃそうだ」

僕が立ち上がると、聰美はいきなり身体を預けてきた。大きく深呼吸しながら、聰美は僕の腰を抱きしめた。僕は聰美の頭を抱き、長い髪を梳くようになぜた。

「怖い」と僕の胸で聰美は言った。

「何が？」

「私の今の気持ちが

「どう怖いの？」

「ここが故郷かもしれないって、思い始めてるの。ここが祖國かもつて、勘違いしそうなの。本当は、私はあの徳利とお猪口を懐かしがってるだけなのよ。民族とか、血だと、そういうものを、私は信じていないから。エキゾチズムとノスタルジーって、同じものなのよ、きっと。来たことのない国に懐かしさを感じるなんて、そんなおかしいでしょ。……でもね、理屈じゃなくて、金浦空港に着陸するときの窓の外の風景、あれを見た瞬間、私、泣きそうになつたの。こんなに心を揺さぶられたのは初めてなの。それで、この徳利なの。怖い。本当に」

何も言えず、僕はただ愛しさに聰美を抱きしめた。聰美の息づかいと鼓動を服の上から久しぶりに捉えて新鮮に感じつつ、一方では、聰美が本当に心を開くのはやはり俺だけなのだ、と義男に対するちよつとした優越感も同時に抱きしめていた。

*

僕に対して聰美は最初からかなり心を開いていた、と思う。

『あなたは私と同じような気がする』と、聰美は知り合った最初の

頃から、まだつきあいを始める前から言っていた。それなのに、僕にはそれがどういう意味なのか、深い関係を幾度か持ち、国籍のことや家族のことを聞くまでわからなかつた。もちろん、今でも完全にわかつたとは言えない。

『わからなくともいい』と、知り合つた頃、聰美は言つた。『私はそう感じたの。そのリアリティは消えないから』

聰美の言つたのは、多分、どこにも属すことの出来ない、どっちつかずの中途半端な雰囲気のことだろうと思う。

*

義男の羨やんでいた僕の父親は、実際には革命党の組織人にはほど遠い夢想家だつた。氣質としては夢見る文学的アナキストに近く、獄中非転向も、結局は、現実を拒否する青年夢想屋の狂信的な強さに過ぎなかつたのではないかと思つ。

僕が小学校低学年だつたある時、父が年金を払つていなことを聞きつけた当時の党の幹部たちが家にやつてきた。

『年金事業は、当然、革命政権にも、引き継がれるだろうから、今払つておかないと、革命が起つたとしても、君は年金を受け取れないかもしね』

『じゃあ、革命の意味つてなんなんですか？ 今のブルジョア政権延命のための年金制度に貢献した人間しか革命後の年金を受け取れないなんて、それはおかしいでしょう？』

『言いたいことは、よくわかるよ。でも、革命後、すぐにみんなをね、豊かに出来るだけの、なんていうか、財政能力が、その、すぐになくなっているか、我々の権力にね、それは、考えないと』

『だったら、革命に貢献した人間から順に、というのが筋じやないんですか。もちろん、これは冗談ですよ。そんなの腐敗した官僚主義ですからね。でも、社会の発展法則から考えれば、そもそも革命というのは社会の物質的生産諸力の発展の結果として、必然的、不可避的に起つるわけでしょう？ そういう、生産力の発展法則という目で見れば、もはや年金なんて制度 자체が、革命後は止揚されて

いると考えるべきじゃないんですか？

『君の言つとおり、最終的には……』

『最終的ですって？ いいですか？ 革命といつものは、歴史法則から言えど、貨幣自体が揚棄されて、人々は能力に応じて働き、必要に応じて受け取れるだけの生産力を、社会が持つようになるということじゃないですか？ そうなるための物質的諸条件は今のこの社会に充分に備わっているんです。だから、問題は、今のブルジョア政権をいかに倒すかだけなんですよ。もはや桎梏でしかない資本主義生産体制を打破して、生産力を全面的に解放してやりさえすれば、年金なんて、そんなもの問題にもならない豊かで自由で平等な世の中になるんです。僕らが今やるべきはブルジョア政権打倒じやないんですか？ それとも、まさか、僕らが年金を受け取る歳になるまで、この腐敗堕落したブルジョア政権、いいや、この行き詰まつた資本主義が続いているとでも言つんですか？ そんなのは敗北主義でさえありません。歴史の発展法則への理解不足です。革命は絶対に起こります。年金なんか、今払う必要はありません』

『君の信念は解つた。でも……』

『信念？ これは信念なんかじゃないですよ』

『考え、ですか？』

『科学的な絶対的真理です。信念なんて言つのは、非合理的な非科学的現象に対し、それでも私は信じるつてこと、非科学的な心情のことでしょう？ 僕の言つているのは、1プラス1が2であるように、資本主義は滅んで共産主義社会が訪れるつてことなんですよ。この科学的真理にいつたい誰が逆らえるつて言つんですか？ 真上に石を投げれば自分の頭に落ちてくる、これが科学的真理です。これを否定する人は、みんな自分の頭の上に石を投げてみれば良いんですよ。落ちてきた石が、その人に科学的真理つてものを教えてくれます。同じ事です。共産主義を否定するものは歴史の中に滅んでいくしかないんです。これが絶対的な科学的真理といつものなんですよ』

その時に限らず、いつも父は流麗な雄弁で幹部たちの訥弁を圧倒していた。父は実に颯爽としていた。

ただ、母は年金をしつかりと払い、きちんと貯蓄を積み上げていた。小さな定食屋を維持しながら職業革命家の父を養い、僕と第二人をほとんど女手一人で育てていた母には、煉瓦を一つづつ積んで築き上げたごとき強固な現実感覚があった。

『お父さんの言つ革命なんか、絶対に起こらない。起らるはずがない』と母は僕ら兄弟にいつも言つていた。『あんたたちも騙されちゃだめだからね。お父さんの言つことを本氣で聞いちゃダメだからね』

こんな一人がなぜ結婚したのか、どうやって父が死ぬまで結婚生活を維持していたのか、僕には想像することさえ出来ない。夫婦の間のことはその夫婦にしかわからないというはそれこそ「科学的真理」なのだろう。ただ僕にわかっているのは、この夫婦間の矛盾と相克が僕という人間の性格を優柔不斷でどつちつかずとしたということだけだ。

『お父さんはしょせんは地主の坊ちゃんなのよ。資本主義が憎いつていうのも、あれは商売への軽蔑だよ。商売なんかせずに生きていた時代の、地主の亡靈が共産主義に化けただけなんだ。よく聞いてごらんよ、お父さんには現実なんか何にも見えてないだろ。現実が少しでも見えていれば、全部を資本主義のせいに出来るはずがないよ。革命で何もかも良くなるなんて、あんなのは書生の戯言だ。お父さんの言うことなんか、まじめに聞くんじゃないよ。あんたたちはきちんと大学に行って、きちんと就職して、普通に生きていくんだよ』

母がこういう現実感覚を僕ら兄弟に吹き込んでいることを父は知つていた。知つていて父があえて僕たちに何も直接吹き込まなかつたのは、自分の「科学的真理」によほど自信があつたからだろう。事実、僕は大学に入り、父の政党よりもさらに過激ないくつかのセクトの周りをうろちょろするよつになつた。ただ、そこで、日和見

主義だの、「ウモリだの、スパイだの」となんんな罵声を浴びせられながらもどこにも属すことがなく、また義男のように活動にのめり込むことがなかつたのも、僕のどこかに母のあの現実感覚が巣くつていたからだと思う。同じ大学を義男は三年で辞め、僕はきちんと四年で卒業して就職したのだった。

*

ホテルの免税店で、取引先へのお土産にする酒やお菓子、母への石鹼を買い、全部宅急便で送るよう手配した。持ち帰るのは娘へのキー・ホールダーだけ。これで自分の買い物はすべて終わり。それからブランドのコーナーを一つづつじっくりと眺めている聰美に少し付き合つて疲れ、椅子の置いてある自販機コーナーで待つことにした。フロア中日本人だらけだつた。通路を歩いていても日本語しか聞こえてこなかつた。値段表示も、いちおうドルが先になつているもの、レジの中を眺めてみれば円ばかりだつた。自販機コーナーも、もちろん回りはすべて日本人で、ただ、北から南までの様々な日本語が話されていた。ここで聞こえてくる日本語に安心してしまってソファはあまりに心地良く、昨夜の睡眠不足もあって、僕はつい横になつて眠り込んでしまつた。

気がつくと僕の身体には毛布が掛けられ、隣には聰美が座つて雑誌を眺めていた。時計を見るともう五時半だつた。

「ごめん、もう行かないと。俺、ものすごい時間寝てたんだな」

「私が来てから三十分くらいかな」

「じゃあ行こうか。何か買つた?」

「ブランドフリークの友達に頼まれたのをいくつかね。あと自分用のバッグと、口紅と」

「本当ならオジサンが買つてあげるべき……」

「やめてよ!」と聰美はいきなり遮つた。

その口調には何か余裕のない緊張があつた。

「どうかしたの?」

「もう行く」

聰美は硬い表情のまま毛布を持つて奥に返しに行つた。戻つてき
た表情も硬かつた。

「どうしたの？」

「後で話す」

そう言つて足早にエレベーターホールの方へ向かつた。ものすご
い早足で、僕はついていくのがやつとだつた。

部屋に戻り、テーブルに並べてあるままの白磁を眺めると、聰美
はいきなりベッドに飛び込み、そのまま伏して枕に顔を埋めて泣き
始めた。

「どうした？」

返事はなかつた。

*
母が泣いたのを一度だけ見たことがある。

党を除名され、党務から解放されて現実との接点をなくした父は、
よりいつそう純粹な共産主義者となり、そして共産主義者らしく、
母の定食屋の三人の従業員をオルグして組合を作らせようとした。
従業員たちに向かつて、父は、「交換価値」や「使用価値」、はて
は「剩余価値」等々の文句が華麗にちりばめられた演説をぶつのだ
つた。父の姿は実に矍鑠としていて、滑稽だった。

『余り物でも集めて「剩余力ツ定食」でも出すか』と従業員たちは
陰で言い合い、父のことなど端から相手にしていなかつた。母はと
言えば、仕事の邪魔をしない限り父の好きにさせていた。そして誰
にも相手にされぬまま、父は脳梗塞で倒れた。

一命はなんとかとりとめ、入院でリハビリを受けるようになつた
のだが、誰彼かまわらず共産主義の思想を説く父はしだいに疎まれ始
め、母でさえ病院の雰囲気が痛くなり、通いのリハビリに切り替え
た。つまり、母の負担が倍増した。しかも間の悪いことにそのころ
の僕の会社の状況は最低最悪で、優香もまた英会話仲間とのランチ
パーティや幼稚園の母親仲間とやるチャリティバザーだとかなんだ
とかで多忙の日々を送つており、おまけに第二人は遠くに就職して

いた。誰の手伝いもない中、母は定食屋と父の介護をほとんど不眠不休でやっていた。

ある早朝、父が玄関に座っていた、という。

『何してるので、風邪ひくよ』

『北京から、そろそろ指令が来るだろ?』

この日から、父は、戦争直後の非合法活動時代に帰ってしまった。そしてその幸せな青春時代に帰ったまま寝たきりになり、一年で死んだ。死はあまりにも急で、近くに住んでいた僕でさえ死に日に会えなかつた。

通夜と葬式、告別式を終えて父の寝ていた床を払つた部屋はただ広く、畳に座る母の姿はただ小さかつた。そして小さい箱に入つた父を優しくなぜながら母は言つた。

『お父さんの言つよくな世の中になればいいって、本当は私も思つてたんだよ。バカなことをつて言いながら、本当は願つてたんだ。でもね、そんなこと、私、生きてるお父さんには一言も言えなかつたさ。口を開けばお父さんの思想をいつもいつも否定して、生きてる間はそればかりだつた。私は科学なんて信用しないけど、お父さんの信念は信用してたんだ。人間にとつては科学より、信念の方が大事さ。お父さんは信念の人だつたよ。立派な人だつた』

母は目頭を押さえ、鼻を啜つた。零れることのない涙が母の目を潤していた。

*

聰美が泣くの見るのはこれが初めてだつた。

一月前にソウルに行くのが決まつてから聰美は何かおかしかつた。どこが、というのではない。話しぶりや、はしゃぎ方、そのいちいちに少しづつズレのようなものがあつた。ソウルに来てからもそうだつた。義男にあれほど構つたり、ふざけたり真面目になつたり、感情の起伏がいつもより激しかつた。そしていきなり泣く……もしかしたら聰美との再婚には国籍や年齢差よりも、もっと大きい壁があるのではないか。そう思つと暗澹とした気持ちになり、ただ僕は

聰美の泣きやむのを待つしかなかつた。

だがもう義男と約束した六時まであと五分になつていた。聰美はまだ枕に顔を埋め、泣きやんではいたけれど顔を上げるよつた氣配はなかつた。

「どうする？ 待ち合わせ」

「すぐは無理。 お化粧が無茶苦茶になつたから」

聰美はようやく口を開いた。けれど顔は上げなかつた。枕の中から

「どうしよう？ どうしたらいい？」

「あなた、先に行つて。私、三十分以内に会流するから。店はわかつてゐる」

「……大丈夫？」

「大丈夫」

「義男にはなんて言つたらいい？」

「用事ですつて」

「じゃあ、用事で遅れるつてだけ、言つよ」

「ありがとう。じゃあ、行つて。見送らないわよ。鍵は置いていつてね」

僕は重い不安を抱えて部屋を出た。

*

約束の店についたときはもう六時を十分も過ぎていた。

「すまん、聰美はもう少し遅れる」

「そうか」とだけ義男は言つた。

義男が注文すると生ビールはすぐに来た。僕らはジョッキを合わせた。

「一泊二日なんてあつと言つ間だな」と僕は言つた。本当にあつと言つ間だつた。

「明日の朝は早いのか？」

「早い。朝八時にお迎えが来る」

「実質、韓国にいたのは今日一日か。前来たときはたしか三泊四日

「だつたよな」

「ああ。それも、最後の日は夕方発だつたから、結構余裕があつた
「聰美さん、何かあつたのか？」

「義男はいきなり言つた。

「うん、ちょっと用事」

「俺に会いたくないつてこと、じゃないよな

「それはない、絶対に」

「よかつた。またこいつして友達をなくしていくんじゃないからつて、
最近、怖いんだ」

「友達、ね」

「もうこの歳になつて、新しい友達なんてできつこないだろ？？」
「そりや そうだらうな」

「俺たちは、もう、若い頃に培つた友情を、残り惜しみつつ、舐めるように、味わうしかない歳なのさ」

「えらく文学的だな」

義男は答えず、テーブルに並べられたつまみのいくつかを少しづつ食べ、ビールを舐めた。昨夜のような飲み方はしなかつた。
「カルビ焼くのは聰美さんが来てからにするか？」と義男は言つた。
「別にかまわんだろう。聰美が来たら追加注文すればいい」
義男は店員に大声で何か言い、

「聰美さん、いい人じゃないか」とこちらに向き直つた。

「ああ。でも、義男もわかつたと思うけど、かなり屈折してるんだ。
結婚できるかどうかは、まだわからんさ」

義男を前にしながら、気持ちはベッドに伏した聰美の方へ行つてしまつていた。本当に、結婚できるかどうかわからないと思つた。
「結婚なんてしなくともいいだろ？」と義男は言つた。

「それもそつなんだがね。でも今度は結婚してもうまくいくような
気がするんだ。優香のときは最初から何か危うかつたからな」

「俺は最初から、あの人はダメだろ？と思つてたよ」

「義男にさえにわかるんだもんな、破綻して当然だな」

「今度の聰美さんはいいと思つ」

「そうか？」

「ああ。あの人はいい」

「もしかして、義男、聰美に惚れた？」

「惚れたよ。でもお前のカノジョを奪おうとは思わん。そつときも言つたけど、もう、女より友達の方が大事な歳だ」

「また歳か、結構気にしてるんだな」

義男は目で返事しながら軽く笑い、店員が焼いてハサミで切ったカルビの切れを野菜にのせて口に運んだ。

「まだ当分ソウルにいるのか？」と僕は言った。言いながら僕もカルビを食べた。肉汁の甘さとチシャの軽い苦さが程良く、美味かつた。

「半分は意地だよ。何をするでもなく、ただいるだけかも知れんがね」

「さすがに義男は、日本が恋しくはならないんだな」

「誰がそんなこと言つた？ 恋しいさ。死ぬほど」

「聰美に言つたことと違つじやないか」

「もう、俺たち、発言の一貫性にこだわるよつた歳じやないだろ？」

「？」

「また歳か？」

「そう、歳だ。それに、俺は日本が嫌いだとは言つたが、恋しくないなんて言つてないぞ」

「嫌いだが恋しいって？」

「愛なんて、そんなものだらう？」

「愛？」

「ああ。仏教で言つよつた愛だよ。受苦としての愛だ」

「よくわからんが、文字通り、愛國者つてわけだ」

義男はまたカルビを口に運んだ。

「……親父がね、俺が二十歳の頃、ウチの神社の初詣の時、参詣客に請われて万歳の音頭をとつたことがあるんだ。親父、なんて音頭

とつたと思う？ 直立不動のまま『大日本帝国』……だよ。みんな
びっくりして息をのんだ。親父、雰囲気に気づいて、自分でも驚い
たんだろうな、『すみません、古い人間だもん』で、『すみません』つ
て、次は『日本の若者のために』って言い直したんだがね。見てい
て、顔から火が出そうなくらい恥かしかつた。あれは俺が活動にの
めり込むきっかけの一つになつたな

「その話、初めて聞いたよ

「そうか？」

「うん、なんで義男が大学辞めてまで活動に専念するかと思つてた
けど、今わかつた。エディップス的な動機だつたんだ」

「そういう言われ方も実は引っかかるんだがね」

「引っかかるつてことは、それなりの真実を含んでいりつてことじ
やないのか？ まあ、あの時代の活動家なんて、みんなそれなりに
エディップス的な動機を抱えていたと思うしな」

「そういうくくり方もまた、むかつくんだよな」と義男は笑つた。
「で、愛国心はどうなつたんだ」と僕は言つた。

「そうか、愛国心ね。俺は一度でいい、親父の音頭で大日本帝国に
万歳を捧げたいよ」

「大日本帝国？」

「ああ」

「ド右翼だな」

「ド右翼だらうと何だらうと、かまわんさ。俺にとつて、大日本帝
国つてのは結局、俺が生きていくための物語の源なのさ。故郷なん
だ。この故郷を否定して否定して生きるつてことが、すでに帝国の
物語なんだよ。最近わかつたんだ。俺の祖国は大日本帝国だよ。日
本国じやない。だからこそ俺はソウルにいるんだ。日帝打倒をソウ
ルでやろうなんて、こんな発想そのものが大日本帝国じやないか？

「違うか？」

「俺にはわからんよ」と言つしかなかつた。実際、よくわからなか
つた。

「初めて韓国に来たとき、本当に、生き別れた双子のきょうだいに再会したようなショックを受けたよ。俺はここに住むべきだつて思つた。今思えば、俺は大日本帝国の幻影を追い求めていたのさ。実際、ここは戦前は大日本帝国の領土だつたんだからな。考えて見ろよ、日本国と大日本帝国との差はどこにある？」

「憲法か？」と僕は上の空で言つた。もう六時半を過ぎ、聰美のことが気になつていた。

「そんな抽象的な問題じゃない」と少しいらついた口調で義男は言った。「台湾と朝鮮だ。大日本帝国にあつて日本国にないもの、それは台湾と朝鮮だ。だから、日本国が嫌で大日本帝国を求めるなら、台湾か朝鮮に行く他はない。だから、俺もそうしたのさ。自分では全く意識しないままね。そして見つけたんだ。今も生きている、日帝イルチエという名の大日本帝国をね。否定し、打倒し、うち碎き、そして我が殉すべき大日本帝国をね」

僕は義男が何を言つているのか真意を測りかね、黙つていた。

「狂つたんじやないかと思つてるだろ？」「

「ああ、少しね」と僕は正直に言つた。

「本当に、大日本帝国に殉じたいなんて、人にはあまり言えないんだがね。また友達をなくすから」と義男は静かに言つた。

「日本の友達は？」と僕は心配になつて聞いてみた。

「ほほ全滅だよ。こつちに遊びに来て、俺に会つて呆れて切れたり、噂を聞いて切れたり、誰も俺のような転向者とは付き合いたくはないのさ」

「いつたいいつ頃の話してるんだよ。学生時代の仲間だつて、みんなそれぞれ転向してゐに決まつてゐるだろ。今時、まだ左翼でいるつてことのほうが変だよ」

「転向つて意味が違うよ。左翼やめるだけなら転向なんて言わないだろ。左翼から右翼になることさ、転向つてのは」

「お前は右翼じやないよ」

「お前は昔から振幅の小さい人間だつたから、極端から極端への無

距離が理解できぬだけじゃないのか

「それはあるだろうが、俺の親父は典型的な狂信的左翼だったからな。非転向がどういうものか、よくわかるんだ。お前はまだ現実との折り合いがついているよ。極端から極端じゃないと思つ」

「お前の親父さんか。俺も非転向で生きたかつたよ」

「やめるよ。そんな綺麗なもんじゃない」

「綺麗だろ、主義に殉じるつてのは」

「たしかにな。でも、その発想こそ大日本帝国だよ。主義を捨てて実利につくつていう戦後日本国の国是とは違つ」

「そう来るか」

「うちの親父も」と僕は少しイライラしてきて、早口で言つた。「結局は最後まで大日本帝国の臣民だつたつてことさ。もしかしたら義男と似てるかも知れないよ。打倒すべき大日本帝国がなくなつた後も、財閥を大企業に置き換えて、ファシズム政権をブルジョア政権に置き換えて、大日本帝国を探し、探して、死ぬまで闘つてたんだから。きっと親父は、戦後日本が、親父が倒すべき大日本帝国をなし崩し的に打倒していくのに耐えられなかつたんだと思う。はつきり言つて、大日本帝国を打倒したのは親父じゃないものな。ウチのお袋のような合理的実利主義だよ。親父は大日本帝国に負けたんじゃない、お袋に負けたんだ。勝てる訳のない闘いだよ。年金もなくてお袋に養われてるなんて、こんな特攻崩れ、玉碎の生き残り以外の何だつて言つんだ。親父は死ぬまで大日本帝国の立派な臣民だつた。もし非転向つていうなら、一生大日本帝国の臣民でしたつて、そういう意味で言つて欲しいな」

「……俺、親父さんに悪いこと言つたか?」

「いや」と僕は少し落ち着いて言つた。「そんなことない。それに、お前は昔はもつと辛辣なことを言つてた」

「バカだつたのさ」

「今は?」

「もつとバカさ、もう死ぬしかないほどのね」

*

「ヌヂョソミヤネヨオ」

店に入ってきた僕らを見つけるなり、聰美は手を振りながら韓国語で言った。さっきまで泣いていたとは思えぬ明るい笑顔だった。

そしてそれを見た義男の表情も一気に華やいだ。さっきまで大日本帝国がなんだのと訳の分からぬ愚痴を垂れていたのと同じ人間の表情とはとても思えなかつた。

それから聰美と義男は韓国語で一言三言言葉を交わした。

「聰美さんの発音は完璧に近いですよ」と義男は日本語で言った。

「そうでしょ？ 実はさっき、韓国人に間違われたんです」

「ほう、どこで？」

「ホテルの免税店の休憩所で、健児さん、ソファに寝込んでしゃつてるんですよ。それで店員さんに毛布持つてきてくれつて言つたんですけど」

「韓国語ですか？」

「はい。で、持つてきてくれたんだけど、どうしたと思います？」

「その店員」

「わからない」

「私の目も見ないで、遠くからぼろ雑巾みたいに毛布を投げてよこしたんですよ」

義男の表情が曇つた。

「私、一瞬、何のことかわからなくて、こういつ礼儀なのかなって思つて、この人に毛布掛けてあげてたら、すぐに、前に座つてた日本人のオジサンたちが教えてくれたんです。オジサンたち、なんて言つたと思います？」

義男はただ悲しそうに首を振つた。僕はことかわからず聰美を見た。

聰美は僕を見ながら言つた。

「『あんな可愛い子、昼間も買えるのか』って」

僕は絶句し、猛烈な怒りが湧いてきた。聰美は続けた。

「そうしたらもう一人が、『高いだろうが』って。『でも韓国の女は情が深いから値段分のことはある、見ろよ、ちゃんと毛布も掛けやつてる。日本人じゃ、商売でそこまではしてくれない』って。『やっぱり韓国の女は情が深い』って」

それを聞いたときの聰美的哀しみを思い、僕の怒りも哀しみに変わった。そしてさっきまでベッドに伏して泣いていながら今明るく振る舞い、その事件を淡々と話している聰美的哀しみに僕は胸がつかえ、やはり哀しみに何も言えなかつた。禿げた日本人中年と韓国語を話す若い女性、その取り合わせがこの国でどう見えるかなど何も考えていなかつた自分、ただ自分の都合を悩んだだけで一緒に泣いてやれなかつた自分が本当に悔しかつた。

「俺がその場にいたら」と義男は言つた。「確実にその連中を殴つてるね」

「でも、屈強な人たち四人ですよ。石川さんじゃ負けますよ、絶対に」

「勝ち負けの問題じゃない」

「でも負けちゃつたら、何にもならないでしょ」

「これは気持ちの問題なんですよ」

「もういいよ」と、僕は堪らず言つた。けれど聰美は続けた。

「その人たち、タベ行つた店のこととか、みんなで買った女性のことをもう、こつちがわからないと思って、大声で喋つてましたよ。そうか、あの人たちに買われると、よつてたかつてあんなことされるんだなつて。すごく勉強になつた」

「最低だ」と僕は自分に向かつても言つた。

「石川さん、私、韓国人に見えます?」

義男は黙つていた。

「私つて、情が深ですか?」と聰美は偽悪的な笑顔で言つた。

「やめてください、そんなこと言つるのは」

「いいじゃないですか。毛布くらいで情が深いって褒めてもらえたんだから」

「あなたはそんなこと言つちゃ いけない」
「そんなことより、私すぐお腹すいた。石川さん、ビールとカル
ビ注文してください」

義男は店員に向かつて韓国語で叫んだ。

*

「どうしたんですか、乾杯しましょうよ」と、黙り込む男二人に聰
美は言った。

僕らはジョッキを合わせた。

「私が来る前、何を話してたんですか？」

「つまらない」とですよ

「どれくらい？」

「カルビと比べた時の『この漬け物くらい』と義男は細く切ったネギ
の漬け物を箸で指した。

「わかりやすい」と聰美は笑いながら言つた。『でも、じゃあ、

カルビは何ですか？』

「さっきの、あなたが間違われた件です」

「そうですか？」

「そうです」

「ああいつとき、どんな態度を取つたらいいんでしょうね、私
「失礼なことを言つなつて、はつきり言つてやつたらいいんですよ
「何語ですか？」

「日本語で、ですよ、もちろん」

「でも私、在日韓国人なんですけど」

義男の表情が一瞬凍りつき、そして、そんなことに驚いちゃいけ
ないと自らを励ましたのがありありとわかる笑顔を作り、言つた。
「だったら、なおさら……」

「なんて言えばいいんです？」と聰美も作った笑顔で言つた。『私は日本人だつて、嘘をつくんですか？ それとも、私は売春婦じゃない、って言うんですか？』

義男は黙り込んだ。

「お一人、もうかなり食べましたよね」と、義男を無視するでもない自然な口調で聰美は言った。「私、この焼けたの、もらいますよ」聰美は肉を野菜でくるんで口に入れ、昨日や今日の昼と同じように「美味しい」と言って笑った。

*

「在日つて言つても、私の場合、母は日本人なんですよ。父も小さい頃に亡くなつて、母の再婚相手は日本人だったんで、第二人も日本人なんです。家族の中に私だけ韓国人つていうの、なんか変でしょう？」だから、韓国人だなんて意識、私、全然ないんです。大人になつたらすぐに日本に帰化するつもりだったんで、韓国名なんか使つたこともなかつたし

「でも、すばらしい発音の韓国語を話すじゃないですか？　かなり習つたんでしょう？」

「カルチャースクールですよ。日本じやちょっととしたブームだから「それでもたいしたものですよ」

「そんなことより、ねえ、私、私が来る前に話してた、このネギの漬け物の話が聞きたいなあ」

「義男の愛国心の話だよ」と僕は言った。義男を困らせてやる「いつ意図も少しあつた。

「本当？」と聰美は言った。「石川さんに愛国心つてあるんですか？」

「ありますよ。でも、日本国に対しての愛国心じゃない

「よくわからないんですけど」

「僕にとつての祖国は大日本帝国なんです」

「え？」と聰美は僕と義男の顔を交互に見た。

「僕は屈折してるつて、言つたでしょ？」と義男は苦々しげに言った。

「私は」と聰美は言った。「日本が好きです。愛してます。これは愛国心なんでしょうか？」

「もし聰美さんが日本人だったら、そんなに簡単に『日本が好きで

す』なんて言えないと思いましたよ」

「あ、それは思います。やっぱり、『じ』かで、日本は自分の国じゃないんだって意識があるんでしょうね」

「いや、それより、日本と韓国とどちらが、つていう感じじゃないんですか？ 韓国に比べて……」

「でも」と聰美は義男を遮った。「私、韓国は今回が初めてなんですよ。比べようがない」

「いえ、さつと、聰美さんは、比べようもないものどうしき、無理に比べれせられてきたんですよ。よく知らないけど祖国だとされている韓国と、よく知っているけど祖国ではない、生まれ育った土地としての日本と」

「そつかー」と聰美は考え込んだ。

「考えて考えて出したその答えだから、何かあつたらすぐ口をついて出るんですよ、日本が好きです、なんて言葉が」

「うんうん、そつかー」と聰美はまた言つた。説得力を認めはするが納得はしない、とでも言つよつた言い方だった。

「このテの話、続けていいんですか？」と義男は言つた。一応聞いてはみるが拒否されることはないだら、とこつ自信のある口調だった。

「もちろんですよ」と聰美は真剣な口調で返した。「私、こんな話するの初めてなんですよ。嬉しいんです。だって、日本では、誰も私が韓国籍だつて知らないし、私から言つ必要もないし、言つたからといって私の特殊な立場が理解してもらえるとは思えないし、だから、健児さん以外では、昨日と今日が初めてですよ、私や韓国のこと、こんなに話するの」

「そりや光榮です」

「だから、石川さんも、もつと『自分のこと』と話してくださいよ。きっと私と石川さんは似てると思うんです。健児さんとは違った意味で、でもどつかで似てると思うんです」

「似てるよ」と僕は昼間の嫉妬がぶり返してきて言つた。「屈折の

具合が微妙に似てる」

「聰美さんと僕と、共通点が一つありますよ」と義男は言った。

「なんですか？」

「どちらも祖国に拒まれてる」

「私は、私の祖国は日本だつて思つてるんですけど」

「日本はあなたを受け入れてますか？」

「完全に受け入れているつてことはないですよ。参政権の問題もありますからね。でも、参政権があつたとしても、私、政治になんか関心ないから、棄権したと思うんです。だから、私の想いとしては、拒まれてる、とまでは言えないんです」

「なるほど」

「ところで、石川さんはどうなんですか？ 日本に拒まれてます？」

「僕の故郷は日本国じやないんです、大日本帝国なんですよ」

「それ、詳しく説明してもらえませんか？」

「昨日、日本帝国主義がどうとかつて少し話題になりましたよね。僕が韓国に来たのは、日本帝国主義を探すためだつたんです。探し打倒するため。だって、日本にいたら、帝国主義なんて見えなかつたから。でもここにはあつたんですよ」

「日帝時代ですね」

「いいえ。歴史の事じやない。今も生きづける大日本帝国が。いいですか、大日本帝国は一九四五年に滅んで、それで台湾と、韓国と、北朝鮮と、そして日本国が出来たんです。みんなそれぞれ大日本帝国の血を受け継いでいるんですよ。それぞれ違つたやり方で親を全否定していますがね。たとえば日本が平和憲法で日帝時代を全否定しているように、同じく韓国は抗日神話で日帝時代を全否定している。でもみんな間違いなく大日本帝国の子どもたちなんです。それぞれ個性があつて違つたように見えていても、みんな実際にはきょうだいなんですよ。その中でもね、韓国は、俺が来た頃はまだ軍人大統領が統治してたんです。もう独裁政権ではありませんでしたけど。でも、街のそいら中、カービン銃を持つた兵士が立つて

ましてね、まるで青年将校に占拠された東京さ。俺は身震いするほど嬉しかった。ここから日本が見える、と本気で思った。だけど、俺の見ていたのはただの大日本帝国の残映だったのさ。でも韓国もあつという間に民主化されて、その残映もあつという間に消えていった。残つたのは何か？ 残映を見たという俺の心のリアリティだけさ。こうなつてしまつたら、俺はもはや俺の心のリアリティを舐めるように愛おしむしかないじやないか。俺が感じたリアリティ、それが俺にとつての大日本帝国さ。それこそが、さつきも健児には言つたが、俺にとつての日本、美しの我が祖国なんだ。……わかる。そんなものの幻影だよ。幻さ。けれど、俺にとつての祖国、否定し、拒否し、鬪つべき祖国と言えるものはそれしかないんだ。あらかじめ拒まれていながら、それでも求めずにいられない故郷、まさに祖国そのものじやないか

聰美は義男の言つことを勘どころできちんと頷きながら聞いていた。それが義男を能弁にしたに違ひなかつた。

「まあ飲めよ」と僕は義男を遮り、焼酎用の小さなグラスに焼酎を注いだ。義男はそれを一口で干した。

「まあまあ」と今度は聰美が注ごうとした。

「ダメですよ、女性がそんなことしちゃ」と義男は言つた。

「いいんです。注ぎたいんだから注がせてください」

「じゃあ」と義男はグラスを差し出し、聰美に注がれると、こんどは舐めるだけで一気には飲まなかつた。

「すみません、僕の言つこと、訳がわからなかつたでしょ？」「はい」と聰美は言つた。

「正直だ。あなたはそれでなくつちや」

「石川さん、日本も韓国も嫌いだつていいましたよね」

「そうですよ。嫌いです」

「大日本帝国を全否定してたから嫌いなんですね」

「そうです。よくわかりましたね。本来なら僕が打倒すべき大日本帝国を、なし崩し的に、いつの間にか滅ぼしちやつた日本と韓国は

嫌いです」

「私はどうなんだろ？……」と言つて聰美は焼酎を舐めた。「私は、もし大日本帝国がなかつたら生まれていなかつたと思つんですよ。私、日本人と朝鮮人とのアイノコですからね」

「うん」と義男は言つて焼酎を干した。

聰美が注ぐと、今度は義男が聰美に注ぎ返した。

「聰美さんも、かなりいけるんでしょ？」「

「多分、石川さんには負けるでしょうけど」

そう言つて聰美は注がれた分を一気に干した。

「すごいな」と義男は言つた。

僕は一人の会話に一言も口を挟むことが出来なかつた。

*

「ところで」と義男は僕の不機嫌な様子に気づいて言つた。「お二人の関係について聞きたいんですが。実は健児からは何も聞いていないに等しいんですよ。失礼じゃなかつたら、聰美さんの口から聞きたいなあ。ねえ、健児つて、あなたにとつて何なんですか？」

「健児ですか？ 私にとつて、今いちばん大事な人です」と聰美は言つた。

「結婚を考えてるんですか？」

「おいおい、俺も聞けないことを聞くなよ」と僕は堪らず言つた。

「結婚ねえ、考えないでもないですよ」

それを聞き、僕は喜びと不安に固まつてしまつた。

「やつぱり結婚してしまつのか」

義男は焼酎を舐め、つまみをつまんだ。

「でも、まだわからないです」と聰美は言い訳のように言い、義男に焼酎を注いだ。

「ありがとう」と義男は言いながら僕の方に向き直りつつ、

「お前は結婚したいんじゃないのか？」

義男の目を見れば、これが酔つて絡んでいるのではなく、さつき聰美と二人で勝手に盛り上がりてしまったことへの埋め合わせだと

「いふことがわかつた。

「一度結婚に失敗した男だからな、俺は」

「俺は失敗さえしてない」

「そつそつ、その話も聞きたい」と聰美は言った。「石川さんは結婚しないんですか？ それとも機会がなかつただけなんですか？」

「きついなあ。もちろん機会がなかつたんですよ。恋愛はしました。でも、こんな屈折した男は、恋愛の対象ではあつても、結婚相手としてはダメなんですよ。生活も不安定ですしね」

「そうかもりせませんね」

「はつきり言うなあ」

「でも、石川さんは、もつと積極的な独身主義者かと思つてました」「独身主義？ ですか。はは、実はそつなんですよ。仕事にしてもなんにしても、縛られるのがいやなんです。それを独身主義つて言うんなら、そうかもりせません」

「私も、ちょっと前までは石川さんのような独身主義だつたんですよ」

「ほひ、それはまたなんで」

「だつて、結婚つていろいろ面倒くさうだし、私もいろいろ屈折してますからね」

「で、健児に会つて結婚主義に転向した、と？」

「そうですね。はつきり言つて、昨日石川さんに会つまでは、健児さんほど屈折した人に会つたことがなかつたんです。健児さんに会つて思つたんです、このくらい屈折した人がこの世にいるんなら、私なんかまだ可愛いもんだつて。もしかしたら私にも結婚くらい出来るかも知れないと自信がついたんです」

「どういう意味だよ」と僕は笑いながら言つた。

「だつて、健児さん、まだプロポーズしてくれない」

「それは……」と僕は聰美のいきなりの言葉に言葉をなくした。

「ほひ、屈折してる」と聰美はちょっと拗ねた口調で言つた。

「もう、ここでプロポーズしろよ」と義男は笑いながら言つた。

「ほんとにこんなバツイチのオッサンでいいのか？」

「あ、ひどーい。私がこれから人にプロポーズの言葉聞かれたとき、『ほんとにこんなバツイチのオッサンでいいのか?』って言えって言つの」

「ごめん。じゃあきちんと言つよ。僕と結婚してください」

「イヤ！」

「え？」

「嘘よ。本当はずつと待つてたのよ、いつ言つてくれるかつて。私の事情はぜんぶ話したんだから、ボールはあなたが持つてたのよ」「婚約成立か?」と義男は言い、「じゃあ、焼酎で三三九度をやる」「などと僕らの返事を待たずに言つた。

「そんなこと」と僕は形だけの抗議をした。

「いいじやないか、やつてみろよ。俺が写真撮つてやるから」「三三九度はともかく、婚約成立の証拠ツーショットはお願ひしうかなあ」

聰美はカメラを義男に渡した。

*

聰美に請われて次に行つたのは、十年前、義男が若者に絡んで大騒ぎになつた店だつた。入り口も内装も綺麗になり、義男に言われなければとても同じ店だとは思えなかつた。

「明日は早いんだつたな」と義男は焼酎を注文した後で言つた。

「そうなんです。もつとゆっくり出来たらいいんですけど

「ツアーダからなあ、融通が利かなくて」

「でもタダなんだから、仕方ないでしょ」と義男は言い、僕らのグラスに焼酎を注いだ。つまみの豚足が来た。

「あ、チョッパリだ」と聰美は言つた。

「そうです」

「何?」と僕は聞いた。

「チョッパリって、日本人の蔑称なの。豚足つていう意味なのよ」
僕はその豚足をつまみ、半透明の皮のついた肉を嚙つた。ハムよ

りももつと噛み答えがあり、薄い塩味がついていた。上品とは言えなかつたが美味かつた。

「私は半チョッパリね、文字通りの」

そう言つて聰美も豚足をつまみ、これも野菜にくるんで食べた。

「結構美味しい店だろ」と義男は言つた。

「うん、でもここ、前も豚足屋だつたつけ」

「違うよ。このあたり入れ替わりが激しいんだ。それに、もし同じ経営者なら、俺はここには絶対に来られないよ」

「確かに」と僕は笑い、義男に焼酎を注いだ。

「ねえ、石川さん」と今度は聰美が義男に注こうとした。義男は僕の注いだ焼酎を一氣で飲み、そして聰美の杯を受けた。

「石川さん、洗骨つてご存じですか？」

「聞いたことはありますけど、韓国の方でやつてた埋葬法ですね」

「何だ、それは」と僕は言つた。

「埋葬して、それで白骨化した骨を掘り出して、洗つて、もう一度埋葬するんだ」

「す」「いな」

「私、実は今日、父親の骨を持つてきてるんです」

僕と義男は絶句して顔を見合せた。

「これなんです」と言つて聰美がバッグから取り出したのは、昼間に買ったあの白磁の徳利セットだった。

「その徳利の中に、まさか」と義男は言つた。

「まさか！ これ、今日、市場で買つたんですけど、これと同じものがずっと前、家にあつたんですよ。第二人が壊しちゃいましたけど。多分、母にとつては、これが私の父親の形見だつたんだと思うんです。これ、私にとつては、私の父親のお骨みたいなものなんでお二人ともバカバカしいとは思うでしょうけど、これ、韓国の方に埋めてやりたいんです。バカバカしいとはお思いでしょうが、半チョッパリの洗骨なんです。歴史も伝統も、なんにもない、どっちつ

かずのアイノコの、胡散臭あい洗骨なんですけど」

「わかりました」と、少しの沈黙の後、義男は言った。「ビニに埋めましょう」

「漢江つて遠いですか」

「遠くはないです。じゃ、ビニを出たら、漢江にタクシーで行きましょうか」

「私、漢江の水でお骨を洗つて、河原に埋めます」

「そのあと、僕がお二人をタクシーでホテルまで送ります」
僕はやつと、僕らがひどく酔い始めていることに気づいた。

*

漢江の岸の道路にタクシーを待たせると、いちばん足許の危うくなつた聰美を挟んで支えながら、僕らは堤防の階段を降りていった。漢江の水面には対岸の明かりが映り煌めき、まるで地獄のように美しかつた。

聰美は河原に降り立つと、そのままペタリと座りこみ、乱暴な手つきでバッグから徳利セットを取り出した。そしてその箱を持って立ち上がり、徳利を右手に握ると、いきなり堤防のコンクリートに投げつけた。中学時代にソフトボールをやつていたという聰美のフォームは確かに、パチリ、という何か情けない音で徳利は砕け、破片が月光に白い軌跡を描いて飛び散つた。

「おいおい」と僕は聰美を止めようと歩み寄つた。
「わたしわあーー！」と聰美は僕を振りきつて叫んだ。「日本人だあ！」

僕は身体が硬直して動けなかつた。

「日本人だあ！」

絶叫に少し遅れて今度はお猪口が砕け、白い破片がお骨のようになつた。

「韓国も日本も、嫌いだあ！ みんな死ね！ 死んでしまええ
絶叫と共にいくつものお猪口が次々と砕けた。

「私はアイノコだあ、私には、国なんて、ないんだあ！」

最後に聰美は紙箱を地面に叩きつけ、踏みつけた。僕はたまらず聰美を後ろから抱きしめ、そして泣いた。聰美は僕の腕の中で泣きながら崩れ落ちた。僕らは河原にしゃがみこみ抱き合って泣いた。見れば義男も一人、河原に伏して地面を叩きながら号泣していた。日本の男が一人、アイノコの女が一人、漢江の河原に泥酔して、月夜に白く照らされた骨片の土に座りこんで泣いているのだった。洗骨どころか、大日本帝国の鬼哭喰々だった。

冷でしこたま飲んだ焼酎が効いてきたのだろう。記憶はここで切れる。気づいたら朝のホテルだった。

*

朝は、一年ほど前に聰美と初めて迎えた朝よりもなお気まずかった。僕らはほとんど口をきかずに食堂へ行き、胃に優しそうだからとアワビのお粥を注文した。

一匙目は信じられないほど美味かつた。思ったような生臭さは全くなかった。

「美味しいね」と僕は言った。

「うん」と、聰美は言って笑った。『石川さん、大丈夫だったから

ら

「憶えてない

「私も」

「でも、僕らが無事にホテルにいるつてことは、あいつも無事なんじゃないかな」

「何があつてもうつっちゃ困るわ

「どうして?」

「だって、結婚式には外せない人でしょう?」

「そうだな」と出来るだけ自然に答えながら、僕の頬は弛んだ。『日本に帰つたら、日取りとか決めないとね』

「あなたは一度目だから、段取りきちんとやってね

「ひどい言い方だな」と僕は言って笑った。

聰美は匙の向こうから幸福そうな視線を寄越していた。僕もまた

そんな目をしていたのだろう。

「本当に美味しいわ、これ」と聰美は照れたように言い、初めて見るような屈託のない笑顔で笑つたのだった。（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100d/>

日本、美しの我が祖国

2010年10月8日15時51分発行